

感謝を持って礼拝をささげる〔要約〕

ローマ12:1

1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。
あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。
それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

① 導入

皆さんは、友達や、ご家族に「どうして教会で礼拝するの？」と聞かれた時、どう答え、どう教えられるでしょうか？私たちは「何故、礼拝するのか」また、神様は、「どのような礼拝を喜ばれるのか」み言葉から共に学んでまいりましょう。

② 何故、礼拝するのか

ローマ人への手紙は、手紙の宛先の通り、パウロが、イタリアにあるローマの教会の人たちに向けて書かれたものです。手紙は16の章に分けられており、註解書によっては、1章から11章までは「救いの教理」……つまり「私たちはどのようにして救いを受けることができるのか」について、そして、12章以降は、「救われたものとしての、クリスチャン生活の実践」について書かれていると説明されている。しかし、そのような理解だけでは、12章1節のみ言葉から、礼拝を、ともすれば義務的なものとして受け取ってしまいかねません。

本日の一つ目のポイント

Q:「私たちは、何故、礼拝するのか」

A:「私たちは「私たちが救ってくださったイエス様への感謝の応答として（感謝を表すために）、礼拝する」

ローマの1章から11章にかけて、パウロは救いの真理、つまり「イエス様が、十字架と復活を通して、信じる人全てに、救いを備えて下さったこと。そして、信じる人はみな、神の子として頂ける。」ことについて書いた。

ローマ3:10 それは、次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求めた人はいない。」

→私たち人間は、みな、神様から離れて生きる罪人です。

ローマ6:23 罪から来る報酬は死です。

→罪を持った結果、人はみな死にます。

ローマ5:8 しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、5:80 神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

→イエス様は、罪人である人間のために血を流して死んでくださいました。

ローマ10:9 なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

ローマ10:12 ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。

ローマ10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

→イエス様の十字架と復活を信じ、イエス様を呼び求めるものは誰でも救われます。

パウロは、12章までの語りかけを持って、「いろいろお話してきましたけれど、これで、神様がどれだけあなたたちを愛し、どれほどの犠牲をもって、救いを与えてくださったことがわかるでしょう？だからあなたたちに勧めるんです。」と語りかけているのです。そしてその勧めが礼拝です。神様の愛に対して、私たちが感謝をもって応答していく事を、パウロは勧めており、その感謝の応答の形が「礼拝」なのです。

この「神様の愛への、感謝の応答」と言うのは、旧約聖書の時代から、ずっと教えられていることです。

申命記6:5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

→この律法は、このように結ばれている。

申命記6:12 あなたは気をつけて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出された主を忘れないようにしなさい。

→いつどの時代においても、神様への礼拝、主にささげることの動機は、「感謝」なのです。

一度、「何故、自分は礼拝に出ているのだろうか？」と、改めて、顧みる時間を取ってみることも、イエス様は喜ばれることだと思います。

③ 神様は、どのような礼拝を喜ばれるのか

本日二つ目のポイント

Q:「主イエス様は、どのような礼拝を喜ばれるのか」

A:「自分のからだを神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげる礼拝」

・・・とは？

A) からだをささげる
まずは、自分自身の「からだをささげる」ことです。

Iコリント 6:19 あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。
Iコリント 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。

Iコリント 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。

私たちの日々の歩みや行動は、まさに「からだ」とおして、あらわされるものなのです。私たちは、み言葉から示され、主イエス様に教えられることを、自分自身の「からだ」を用いて行動に移し、ひとつひとつの行いとしてあらわします。わたしたちは、その良い事も悪い事も行うことのできるからだを、まず主におささげし、文字とおり、食べるときも、飲むときも、何をするときも、神の栄光を現すために用いていただくのです。これが、からだをおささげするという事です。

B) 「聖いもの」としてささげる
次は、からだを「聖いもの」としてささげる事です。
聖書における「聖いもの」という言葉の意味は、一般的な「清いもの、純粋なもの、正しいもの」といった意味ではなく、「他のものと区別されている」「聖別されている」という意味です。つまり、「これは主である神様のものです」と区別されている、と言うことです。パウロは、クリスチャンが自分自身を主におささげする時、そのすべてをおささげすることを勧めています。つまり、「私の中の、これとこれは捨てられないのですが、あれとそれはおささげします。」という姿勢ではなく、「自分自身はもうあなたの所有物です。あなたのものです、自由に使ってください。」という心で、ささげることを勧めているのです。

C) 「生きた」ものとしてささげる
そして最後は、からだを「生きた」ものとしてささげる事です。旧約聖書の時代の、神様へのささげものとは本来、動物を殺して、生贄としてささげるものです。しかし、ここでパウロが勧める「生きた」ささげものというのは、イエス様の恵みの贖いによって、罪に死んだ物から、主に生かされたものとして自分をおささげするという事です。

このようにみ言葉を見ていくと、礼拝とは、自分自身をささげることであり、

「生きた」ものとしてささげる。
→まず自分自身が罪に死んだものから、主の愛と贖いにより、イエス様を信じ、生かされたものとしてささげる。

「聖なるもの」としてささげる。
→自分主体ではなく、「わたしはもうイエス様のものです。」という姿勢でささげる。

からだをささげる
→主の栄光をあらわすために、実際に行動を伴ってささげる。

これらをひっくるめて、ささげる事こそが神様に喜ばれる礼拝です。
そして、このように神様を礼拝する源泉は、私たちが愛し、救って下さった神様に対する「感謝」なのです。このように、み言葉、パウロの勧めを読む時、礼拝をお捧げすることは、「イエス様の愛・あわれみ」を本当の意味で知り、感謝をもって受け入れている者が、主イエス様を信じているものの特権です。

④ まとめ

本日は、「感謝を持って礼拝をささげる」というテーマで奨励をさせて頂きました。

礼拝とは本来、私たちが愛してくださるイエス様の愛に感謝するからこそ、良くしてくださるイエス様の愛を覚えるからこそ、その愛に感謝し、応答する形で、自分自身を主にささげ、行うものです。今一度、自分自身を贖って下さった神様と、その愛を思い起こし、その愛に答える形で、主に喜ばれる感謝の礼拝をささげることが出来れば幸いです。

本日は、詩篇 103 篇の一部をお読みして、奨励を閉じさせて頂きたいと思っております。

詩篇 103:1 わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。

詩篇 103:2 わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

お祈りいたします。